書評

西丸四方著

「島崎藤村の秘密」

中野恵海

四六判、百七十四頁の小冊子ではあるが、内容は、題名ともショッキングである。著者は、藤村の長兄重明の長女いさ子の婿に当る人。同著書中の頁一三二及び頁一三三に島崎家系図があって詳しい。この系図は「吾胸の底のここには言ひがたき秘密住めり」と言う、藤村の「落梅集」の一句をとって項目とした中に図示したものである。昭和十一年に東大医学部卒、「傑出人脳の研究」（岩波）などの著書があり、精神医学専門でその方の権威である。後、縁あって信州大学医学部教授となった事から、藤村色にとりまかれる事となりこの様な著書を生むこととなった様である。この辺の事も一切、この著に詳しい。あとがきには、「この記録はもちろん厳密な学問的調査ではなく、興味半分のすさびに過ぎない」と言ってあって、内容の叙述態度は、目次にある通り「かたりべのおうな」が淡々と物語るという風で、その項目は、一、馬篭本陣、二、春樹の幼時、三、父母同胞、四、明治学院、五、新花町、六、小諸、七、西大久保、八、新片町、九、二本榎、十、こま子、十一、飯倉片町、十二、下六番町となっており、藤村の生ひ立ち、その環境から終焉に至るまで全生涯に亘っている。叙述の態度は、そのショッキングな題名にくらべ、さりげなく淡々として、読む者をしてむしろ或る種の物足りなさを感ぜしめる態であるが、更に最後の項目に、〝吾胸の底のここには言ひがたき秘密住めり〟と、〝憂国と恋〟（正樹のうたから）とを置いた事は、この書の眼目を濃くうき立たせる。

作品とその作家の現実生活との関聯という問題は従来、藤村研究家、藤村を批評する者の胸中を往来する課題ではあり、この明治、大正、昭和と文字通り三代を現役、第一線作家として生き抜いた、その意味では近代文学の代表的文豪の名に恥ぢない、藤村の最も注目される長篇の殆んどが所謂、自伝と呼ばれる、直接吾が身の現実生活の体験を採り上げたものであってみれば、まさに当然の事と言わねばならない。殊に、戦後平野謙がその「新生論」に於て、この課題に鋭利なメスを振い、執拗にくい下り、その芸術的作因と現実的作因をときほぐすという難事業をやってのけ、とにも角にも怪刀乱麻の腕の冴えを見せて、一つの作家論の極北を示したことから、藤村の現実生活への注目の度合いがたかまった事は確かである。中には、亀井勝一郎氏の如く、平野の態度を、探偵事務所の所員の姿を聯想するといい、作家にとってその作品が凡てであるとする態度も一つのすぐれた独自の評価態度には違いないが、作家研究には、所謂探偵的要素も不可避なものであるとも考えられ、殊にものが藤村の場合などに於ては（特に、家、新生など）寧ろ必要欠くべからざるものであるとも言える。この書の含む「秘密」の最も大なるものは「生母の姦通」とその秘密の子「友弥」の事であろう。書中の四、明治学院の「友弥」の項（頁四一）では

――春樹様の三兄友弥様は幼い時から学問嫌いのいたずらっ子でございました。正樹お父様は学者でしたから「おれの子でない様な奴だ」といっておいでした。しかし本当に「おれの子」ではなかったのでございます。正樹様には異母妹との妖しい関係がございましたし、家をよそにしてあちこち出ておいでになりましたので、縫様には魔がさしたのでございましょう。稲葉屋の主人との間に生れたのが友弥様なのでございました。――中略――。

この秘密は作品の中にはどこにも現われて参りませんが、春樹様は御存知であったにちがいありません。

藤村の作品で友弥の出て来るのは「家」である。十四、五才の時に呉服屋の小僧となったが長続きせず、横浜に出て奔放な生活をしたが、悪性の毒を受け、足も跛になり、手にはおできができ、兄弟中のやっかい者になり、皆にいやがられ、悪いと知りつつ皆を困らせるという人物である。そのひがみの末は嫂に当る事になり、長兄秀雄が入牢中は、夜けしからぬふるまいに出ようとし、嫂は娘を盾に何とかすごしたが秀雄が帰った時、張りつめた気が抜けて、気を失ってしまったという。この友弥の大体の姿は「家」にある通りであるが、他の兄弟に比して藤村の筆は淡彩に過ぎるように思われる。この友弥には、風雅な所があり、国文学

も勉強し、歌は好きで自らは佐々木信綱の許に入り、姪のいさ子（長兄秀雄の長女）を師の信綱につけて和歌を習わせたりした人物である。文学趣味的な面では藤村にとっては唯一の兄弟で、勿論その事は一寸「家」の中にも出ては来るが、親し味や、兄弟愛的な叙述は足らな過ぎる様に思われる。又、それよりも甚だしいのは他の兄弟達の友弥に対する冷淡な態度である。信州人特有の親類一家身寄の者には厚くするという、その色彩の濃い中で、兄弟全体が変によそよそしいのはどういう訳か。友弥自身の不身持丈では一寸納得がいかぬ。ここに友弥の「秘密」が作用しているのではないか。又更に兄弟間に知れわたったこの秘密が友弥をかつて不羈奔放の生活を送らせ、兄弟いやがらせのすね者にさせたのではないか。

右の引用文中の父正樹の異母妹（由伎）への妖しい関係も甚だ重大である。著者西丸氏はその恋の内容をうかがうものとして巻末に正樹の恋のうたを挙げたものだろうと思われる。このうたそのものは他の藤村の作品、ことに晩年の大作「夜明け前」にも出て来るものであり、藤村はほほえましき父の青春をそこにみる思いで単純な憧景の心で暖かくこれをみている（或はそんなふりをしている）のであるが、「夜明け前」に於ける青山半蔵（正樹）の狂気の原因を理想と現実の分裂から来る破綻としてみているのに対し、西丸氏は、それはしろうとの見方であって、正樹の精神病は「夜明け前」にある通り、幻覚と妄想を主とするもので、今日なら精神分裂とされようが五十才過ぎて発病（長女園子もほぼ同じ年齢の頃発病、藤村の作品では、夫からうつされた病毒、脳梅毒の様なものとなっているが症状は精神分裂病的である）している点に問題ありとして、若し懊悩によるものと考えるなら、異母妹との近親相姦とか、不義の子友弥に関するコンプレックスとして考えるべきである、としている。

藤村の父に対する慕情はその作品に著しい。「春」「家」「新生」そして「夜明け前」。自伝作品の系列からは異例のように見える「破戒」に於てすら、主人公瀬川丑松の父に対する気持の中に読者はまざまざとそれを感じとれる位のものである。それがどうして母を描かないのか。これは素朴な読者の疑問であろう。姦通した母を藤村は許せなかった。異母妹への妖しい近親相姦関係に於ける父よりも、不義の子、友弥という兄を眼の前にしている藤村が、母を嫌悪し通した。「家」に於ける妻への執拗な妬心。この作者は女性を嫌悪している。私はよくそう思った。そんな事も今の私には「友弥」の問題によって了解出来るのではないかと思っている。平野が鋭く指摘したように、長兄の娘に対して丈でなく、今度は次兄の娘に対して、ああ一度ならず二度までもという深い自責の思いの上に、父のこと、そして今、母のことがのしかかるとすれば「新生」の懊悩は更に深まるというものである。この書は更に藤村の作品に出て来る殆んど凡ての人物のおよその生涯を簡潔に叙してもいる。それが有難い。唯、精神病医学の立場からは「漱石の病跡」（千谷七郎著）のような業績はなく、文芸批評家側からのような作品との問題が提出されないのでいささか物足りないであろう。然し私のこの紹介の文を読んで尚、この書を読まずして「藤村論」が出来るかどうか、私は疑問に思うものである。これがこの書の価値である。

（昭41・6・25刊・有信堂・価四五〇）